

## 歩みを止めない ～私立大学研究ブランディング事業の今後に向けて～

研究代表者 大矢 裕一

化学生命工学部 化学・物質工学科 教授  
医工薬連携研究センター長



元号も改まり、新たな気分でプロジェクトに向かいたいところである。しかし、それに水を差すような状況が生じていたことを報告しておきたい。巻頭の言葉としては少し相応しくない内容かもしれないが、一切触れないでいるのも不自然であり、状況をよくご存知でない方への説明のためにも一言書いておきたい。

本年2月15日に文科省私学助成課長（公印なし）で以下のような通知が届いた。

「私立大学研究ブランディング事業の選定校に対する支援については、（中略）教育研究そのものの質の向上に対する支援を優先する考え方の下、所要の見直しをいたしました。具体的には、支援期間を平成31年度までとさせていただきます、（中略）支援終了後速やかに本事業の成果等を各校においておまとめの上ウェブサイト上に公表いただき・・・（後略）」

要するに、2016年度（および2017年度）に採択された全てのプロジェクトの支援期間は、当初予定の5年間ではなく今年度までとなり、5年を待たずして成果報告をまとめよ、という通知である。

この支援中止に関しては3月に大阪と東京で説明会があり、小職は大阪の説明会に出席したが、何故、一度認めたものを覆さなければならなかったのかについての合理的な説明があったとは到底言えないものであった。我々の側に落ち度があったわけではなく、一方的に支援中止となったことには納得できないし、教育行政は文科省と各大学の信頼関係で成り立つものであって、それを裏切るような今回の決定には怒りを禁じえない。

しかしながら、決定がどうあろうと、我々がなすべきことは、粛々と目の前の研究を遂行していくのみである。本プロジェクトが目指している医療器材の開発は、一朝一夕に結果が得られるものではない。もとより、研究に終わりはない。発見や達成は、それまでにない新たな視座を可能にし、顕在化していなかった新たな課題・目標を見つけ、さらなる高みへと踏み出す契機となる。大学本部には、当初予定の5年終了まで計画通りにプロジェクトが遂行できるよう、さらには5年終了後もプロジェクトとしての研究体制を継続できるよう、支援をお願いしている。

私立大学の「ブランド化」という言葉については、少し前に有名私立大学における不祥事などもあり、世間の捉え方が必ずしも好意的なものばかりではないことも承知している。しかし、大学本来の役割である教育と研究、本号の特集にもある人材育成に関する実績や名声（＝「〇〇を学びたいならば〇〇大学」）は、もっと正当に評価されるべきであるというのは、私立大学に籍を置く人間の側の偏重した考え方ではあるまい。

幸い、我々のプロジェクトは非常に順調に進捗しており、学外からも高い評価を受け、校友などの本学関係者からは熱い声援を頂戴している。こうしたプロジェクトを実行するきっかけを得たことについては、率直に文科省や関係各方面に感謝したい。当初から支援期間は5年であって、遅かれ早かれ自分たちの力だけで道を歩んでいかなければならなかったことに変わりはない。むしろ、助走の期間の後には、外部からの支援なしに独り立ちして進んでいけるようであれば、大学の研究ブランドを確立したとは言えないだろう。

プロジェクトメンバーの先生方には、これまで以上の覚悟で、より一層の研鑽と努力をしていただくよう期待したい。各方面の皆様方には、プロジェクトの行く末を見守っていただき、引き続きのご理解とご協力をお願いする所存である。